

【 復活のトロパリ 第1調 】

きゆ うせ え いしゆよ、 イウ デ ヤ の ひ と は か を
 救 世 主 人 墓
 ふ っ じ て 、 へ い そ つ なんぢ の い さ ぎ よ き み を
 封 兵 卒 爾 潔 軀
 ま も る と き 、 なんぢ は み っ か め に ふ く か つ
 守 時 爾 三 日 目 復 活
 し て 、 せ かい に い の ち を た ま え り 。
 世 界 生 命 賜
 ゆ え に て ん ぐ ん は なんぢ い の ち を ほ ど こ す の
 故 天 軍 爾 生 命 施
 し ゆ に よ べ り 、 ハ リ ス ト ス よ 、 こ う え い は
 主 呼 光 榮
 なんぢ の ふ く か つ に き し 、 こ お う え い は なんぢ
 爾 復 活 歸 し 光 榮 爾
 の く に に き す 、 ひ と り ひ と を い つ く し む
 國 歸 獨 人 慈
 し ゆ よ 、 こ う え い は なんぢ の お も ん ぱ か り に
 主 光 榮 爾 慮
 き す 。

【 生神女進堂祭のトロパリ 第4調 】

こ ん に ち か み の め ぐ み は し め さ あ れ 、 ひ
 今日 神 恩 恵 示 人

とびとのすくいはずたえらる。どうてい
 人 救 傳 童 貞

ぢよはあきらかにかみのでんにあらわれ、
 女 明 神 殿 現

あらかじめハリストスをしゅうじんにしらしむ。
 預 衆 人 知

われらもこえをあげてかれによばん。ぞう
 我 等 聲 揚 彼 呼 ん。 ぞ 造

ぶつしゅのおもんばかりとじょうじゅなるものよ、
 物 主 思 慮 成 就 者

よろこべよ。
 慶

【 日本の亜使徒ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
 使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
 實 神 智 役 者 聖

なるしんにえられたるふえ、ハリストスのあい
 神 撰 笛 愛

にみちたるうつわ、わがくにのこう
 満 器 我 國 光

しよおしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
 照 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ、なんぢのぼくぐんのため あめ、および
爾 羊 群 爲 及

ぜんせかいのため、いのちをたもうせい
全世界 爲 生 命 賜 聖

さんしゃにいのりたまえ。
三者 祈 給

【 日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調 】

せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが
成 聖 者 亞 使 徒 聖 我

くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ
國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

しに、なんぢははじめわがくににおいておの
爾 初 我 國 於 己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの
外 來 者 知

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて
光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか
屬 神 子 爲 彼 等 神

みのおんちょうをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
恩 寵 與 教 會 建

たり、いまこのきょうかいのためにいのり
今 此 教 會 爲 祈

た ま あ え 、 け だ し わ れ ら そ の し ょ し は な ん
給 蓋 我 等 其 諸 子 爾

ち に よ ぶ 、 わ が よ き ぼ く し ゃ よ 、 よ ろ こ
呼 我 善 牧 者 慶

べ よ 。

【 生神女進堂祭のコンダク 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ お と せ い し ん に き
光 榮 父 子 お と 聖 神 歸

す 、

き ゆ う せ い し ゆ の い と き よ お き で ん 、 い た り て
救 世 主 最 淨 殿 至

と お と き み や 、 か み の こ う え い の せ い に
貴 宮 神 光 榮 聖

せ ら れ し ほ う ぞ う た る ど う て い ぢ ゃ お は
宝 蔵 童 貞 女

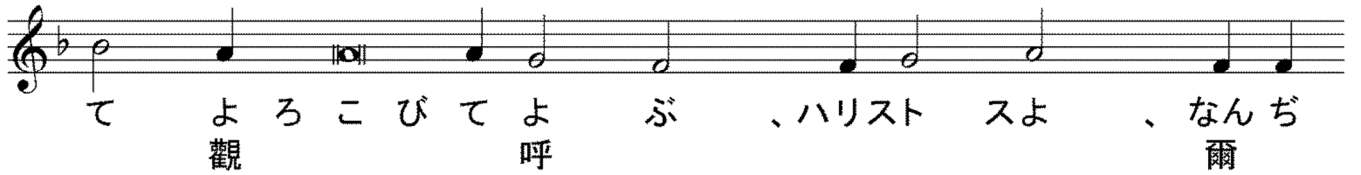
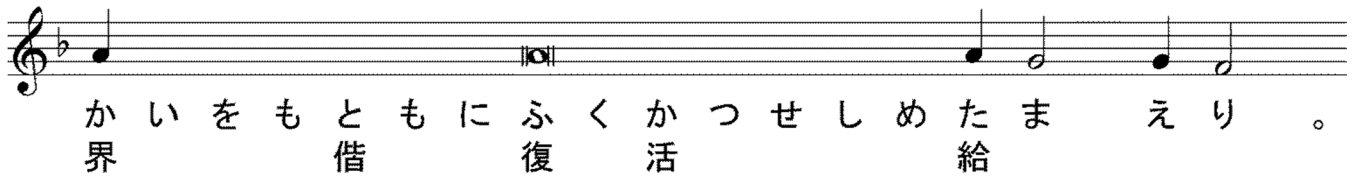
こ ん に ち し ゆ の い え に い れ ら れ て 、 せ い し ん の お ん ち ゃ
今 日 主 家 入 聖 神 恩

う を と も に い ら し む 。 か み の つ か い ら
共 入 神 使 等

は か れ を う た い て い う 、 こ れ て ん の ま く
彼 歌 日 此 天 幕



【 復活のコンダク 第1調 】



司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と

なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人と祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
 聖神 聖勇毅 聖
 じょうせいのもものよ、われらをあわれめ
 常生者 我等 憐
 よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖神 聖勇毅 聖
 なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
 常生者 我等 憐
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 聖神 聖勇毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
 光 榮 父 子 聖 神
 に き す 、 い ま も い つ も よ よ 世 世 に 、 ア ミ ン 。
 歸 今 何 時 世 世
 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇
 き 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 毅 聖 常 生 者 我 等
 あ わ れ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 提綱 主日第1調 及び生神女の第3調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、我等爾を頼むが如く、爾の憐を我等に垂れ給え、

し ゅ よ 、 わ れ ら な ん ち を た の む が ご と く 、
 主 我 等 爾 頼 如

な んぢの あ わ れ み を わ れ ら に た あ れ えたあま
 爾 憐 我 等 垂 給
 え 。

誦經) ^{ぎじん} 義人よ、^{しゅ} 主の爲に ^{ため} 喜 ^{よろこ} べ、^{さんえい} 讚 ^{ぎしゃ} 榮 ^{かな} するは義者に適う、

しゅ よ 、 わ れ ら な んぢを た の む が ご と く 、
 主 我 等 爾 頼 如
 な んぢの あ わ れ み を わ れ ら に た あ れ えたあま
 爾 憐 我 等 垂 給
 え 。

誦經) ^わ 我 ^{たましい} 靈 ^{しゅ} は主を ^{あが} 崇め、^わ 我 ^{しん} 神 ^{かみわ} は神 ^{きゆうしゅ} 我 ^{よろこ} が救主を悦べり、

わ が た ま し い は しゅを あ が め 、 わ が し んは
 我 靈 主 崇 我 神
 か み わ が きゆうしゅを よろこべり 。

【 ^{アポストロス} 使徒經 229 端 エフェス書5章8～19節
 320 端 エウレイ書9章1～7節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルがエフェス人に ^{じん} 達 ^{たつ} する ^{しよ} 書 ^{よみ} の讀、

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄弟よ、^{ひかり} 光 ^こ の子 ^{ごと} の如 ^{おこな} く行 ^{けだしん} え。蓋 ^み 神 ^{およそ} の實 ^{じあい} は凡 ^{こうぎ} の慈愛 ^{しんじつ} と公義 ^あ と眞實 ^{なんぢ} とに在り。爾
 らかみ ^{よろこ} 神 ^{ところ} の悦 ^{なに} ぶ所 ^{つまびらか} の何 ^み なる ^{むす} を ^{くらやみ} 審 ^{おこない} にせよ、實 ^{あづか} を結 ^{なか} ばざる暗昧 ^{こと} の行 ^{こと} に與 ^{こと} る勿 ^{こと} れ、
 むしろこれ ^せ 甯 ^{けだしかれら} 之 ^{ひそか} を責 ^{おこな} めよ。蓋 ^{こと} 彼 ^い 等 ^{または} が ^べ 隠 ^{およ} に ^せ 行 ^{こと} う事 ^{こと} は、言 ^{こと} うも亦 ^{こと} 耻 ^{こと} づ可 ^{こと} し。凡 ^{こと} そ責 ^{こと} めらる ^{こと} る事 ^{こと} は

ひかり よ あらわ けだしおよ あらわ こと ひかり ゆえ い い ものお し
光に由りて顯る、蓋凡そ顯るる事は光なり。故に云えるあり、寐ぬる者起きよ、死
より復活せよ、ハリストス爾を照さん。是を以て視よ、行を慎みて無智の者の如く
せず、乃智ある者の如くせよ、時を惜むべし、日は悪しければなり。是の故に思慮なき者
と爲る勿れ、乃神の旨の何なるを覺れ。又酒に酔う勿れ、此れに由りて放蕩あり、
乃神に満てられよ。聖詠と歌頌と屬神の詩賦とを以て、口に唱え、心に和して、
主を讚美せよ。

(比較用 口語訳) 光の子らしく歩きなさい—— 光はあらゆる善意と正義と真実との実を結ばせるものである—— 主に喜ばれるものがなんであるかを、わきまえ知りなさい。実を結ばないやみのわざに加わらないで、むしろ、それを指摘してやりなさい。彼らが隠れて行っていることは、口にすることも恥ずかしい事である。しかし、光にさらされる時、すべてのものは、明らかになる。明らかにされたものは皆、光となるのである。だから、こう書いてある、「眠っている者よ、起きなさい。死人のなかから、立ち上がりなさい。そうすれば、キリストがあなたを照すであろう」。そこで、あなたがたの歩きかたによく注意して、賢くない者のようではなく、賢い者のように歩き、今の時を生かして用いなさい。今は悪い時代なのである。だから、愚かな者にならないで、主の御旨がなんであるかを悟りなさい。酒に酔ってはいけない。それは乱行のもとである。むしろ御霊に満たされて、詩とさんびと靈の歌とをもって語り合い、主にむかって心からさんびの歌をうたいなさい。

誦經) 兄弟よ、第一の約には奉事の例と地に屬する聖所とありき。蓋第一の幕は設けられて、其内に燈臺と、案と、供前の餅とありき、是を聖所と稱す。第二の帷の後に至聖所と稱する幕ありき。茲には金の香爐と、徧く金を蔽いたる約匱とあり、其内にマンナを藏めたる金の壺、アアロンの萌せる杖、及び約の碑あり、其上に贖罪所を覆える光榮のヘルヴィムありき。此等の事は今詳に言うを庸いず。此等の物斯く備わりて、第一の幕には司祭等恒に入りて、奉事を行い、第二の幕には獨司祭長のみ、一年に一次、血を攜えざるなくして入り、之を己の爲及び民の愆の爲に獻ず。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。初めの契約にも、礼拝についてのさまざまな規定と、地上の聖所とがあった。すなわち、まず幕屋が設けられ、その前の場所には燭台と机と供えのパンとが置かれていた。

これが、聖所と呼ばれた。また第二の幕の後に、別の場所があり、それは至聖所と呼ばれた。そこには金の香壇と全面金でおおわれた契約の箱とが置かれ、その中にはマナのはいつている金のつぼと、芽を出したアロンのつえと、契約の石板とが入れてあり、箱の上には栄光に輝くケルビムがあつて、贖罪所をおおっていた。これらのことについては、今ここで、いちいち述べるできない。これらのものが、以上のように整えられた上で、祭司たちは常に幕屋の前の場所にはいつて礼拝をするのであるが、幕屋の奥には大祭司が年に一度だけはいるのであり、しかも自分自身と民とのあやまちのためにささげる血をたずさえないで行くことはない。

【 アリルイヤ 主日第1調 及び生神女の第8調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{ねが わ ため あだ かえ われ しょみん したが かみ さんしょう} アリルイヤ、願わくは我が爲に仇を復し、我に諸民を従わしむる神は讃頌せられん、

アリル イ ヤ、アリル イ ヤ、
ア リル イ ヤ。

誦經) ^{おおい すくい おう ほどこ あわれみ なんぢ あぶら もの およ そのすえ よよ} 大なる救を王に施し、憐を爾の膏つけられし者ダヴィド及び其裔に世に垂るる者よ、我 ^{た もの われなんぢ な うた} 爾の名に歌わん、

アリル イ ヤ、アリル イ ヤ、
ア リル イ ヤ。

誦經) ^{ちよ これ き これ み なんぢ みみ かたぶ} 女よ、之を聴き、之を觀、爾の耳を傾けよ、

アリル イ ヤ、アリル イ ヤ、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん}人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の ^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ}浄き光を輝かし、我が思念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる ^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ ところ}誠を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所 ^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ}を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、 ^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん}爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし ^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ}て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書66端 12章16~21節
ルカ福音書54端 10章38~42節、11章27~28節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん}睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ}ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) ^{つつし き しゅ さ たとえ もう い あると ひと たはた よ みの}謹みて聴くべし、主は左の譬を設けて曰えり、或富める人に田畝の善く實れるあり、 ^{かれみづか はか い われなに な けだしわ さくもつ おさ ところ またい}彼自ら忖りて曰えり、我何を爲さんか、蓋我が作物を藏むべき處なし。又曰えり、 ^{われか な わ くら こぼ さら おおい もの た こうち わ ことごと こくもつ}我斯く爲さん、我が倉を毀ちて、更に大なる者を建て、此の中に我が悉くの穀物と ^{たから あつ わ たましい い たましい なんぢ たねん ため たくわ おお たから}貨物とを聚めて、我が靈に謂わん、靈よ、爾には多年の爲に蓄えたる多くの貨物 ^{やす くら の たのし しか かみ かれ い むち もの こんやなんぢ}あり、息み、食い、飲み、樂めと。然れども神は彼に謂えり、無知なる者よ、今夜爾の

たましい なんぢ もと しか なんぢ そな ところ もの だれ き およ おのれ たため
靈を爾より索めん、然らば爾が備えし所の者は誰に歸せんか。凡そ己の爲に

たから つ かみ おいと もの か ごと
財を積み、神に於て富まざる者は是くの如し。

(比較用 口語訳) イエスは一つの譬を語られた、「ある金持の畑が豊作であった。そこで彼は心の中で、『どうしようか、わたしの作物をしまっておく所がないのだが』と思いめぐらして言った、『こうしよう。わたしの倉を取りこわし、もっと大きいのを建てて、そこに穀物や食糧を全部しまひ込もう。そして自分の魂に言おう。たましいよ、おまえには長年分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ、食え、飲め、楽しめ』。すると神が彼に言われた、『愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか』。自分のために宝を積んで神に対して富まない者は、これと同じである」。

司祭) か とき かれら ゆ とき ひとつ むら い あるおんな な もの
彼の時、彼等が行ける時、イイスス一の村に入りしに、或婦マルファと名づくる者、

かれ そのいえ むか そのしまい な もの そくか ぎ そのことば
彼を其家に迎えたり。其姉妹にマリヤと名づくる者あり、イイススの足下に坐して、其言

き きき きょうじ おお よ ころ わづら つ い しゅ わ しまい
を聴けり。マルファは供事の多きに困りて心を煩わし、就きて曰えり、主よ、我が姉妹、

われひとり のこ きょうじ なんぢい な これ めい われ たす
我一人を遺して供事せしむるを爾意と爲さざるか、之に命じて、我を助けしめよ。イ

スス かれ こた い なんぢ おお こと おもんばか ころ ろう
スス彼に答えて曰えり、マルファよ、マルファよ、爾は多くの事を慮りて心を勞せ

り、しか もと ところ ひとつ よ ぶん えら これ かれ うば べ
り、然れども需むる所は一のみ。マリヤは善き分を擇びたり、是は彼より奪う可から

これ い とき ひとり おんなたみ うち こえ あ かれ い なんぢ はら はら なんぢ
ず。此を言う時、一の婦民の中より聲を揚げて、彼に謂えり、爾を孕みし腹と爾

す ち さいわい かれ い しか かみ ことば き これ まも もの さいわい
が嘯いし乳とは福なり。彼は曰えり、然り、神の言を聴きて之を守る者は福なり。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮
はなんぢにきす。
爾 歸

(比較用 口語訳) イエスがある村へはいられた。するとマルタという名の女がイエスを家に迎え入れた。この女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、御言に聞き入っていた。ところが、マルタは接待のことで忙がしくて心をとりにみだし、イエスのところにきて言った、「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください」。主は答えて言われた、「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思

いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである」。イエスがこう話しておられるとき、群衆の中からひとりの女が声を張りあげて言った、「あなたを宿した胎、あなたが吸われた乳房は、なんとめぐまれていることでしょう」。しかしイエスは言われた、「いや、めぐまれているのは、むしろ、神の言を聞いてそれを守る人たちである」。

※聖体礼儀③（金口イオアン聖体礼儀）へ